日常的な感染対策活動のＭＲＳＡ発生率に対する効果

ＩＣＴ
○有瀬 和美　　武内 世生

【目　　的】

ＩＣＴの活動を始めて、５年が経過した。この間、手指衛生の徹底、適切な個人防護具の着用、抗菌薬適正使用の推進などの地味な活動に力を入れてきた。これらの包括的な感染対策を継続することのＭＲＳＡ発生率に対する効果を報告する。

【方　　法】

2005 年から 2009 年までの、手指衛生遵守率、速乾性手指消毒剤使用量、手袋とビニルエプロン使用量、および抗菌薬使用状況と、ＭＲＳＡ検出率および新規院内発生率の関係を比較検討した。

【結　　果】

2005 年から 2009 年までのＩＣＴの目視による手指衛生遵守率は、49.7％、60.6％、57.4％、64.3％、65.0％と上昇し、1000 入院患者あたりの速乾性手指消毒剤使用量は、8.01 L、10.25L、11.15L、14.40L、11.91L と増加傾向であった。2005 年 7 月に全病室に手袋とビニルエプロンを設置した。2005 年から 2008 年の使用量は手袋が 1.6 倍、ビニルエプロンは 2.3 倍となった。抗菌薬適正使用の推進については、2005 年 12 月から使用状況の報告を開始し、2006 年 9 月からは診療科毎の報告書を作成して届けている。2005 年と 2009 年の 1 月から 3 月の 3 ヵ月平均を比較すると、広域抗菌薬は 30%、中でもカルバペネム系は 70% 減少した。2005 年から 2009 年までのＭＲＳＡ発生率は、1000 入院患者延べ日数あたり 2.56、2.26、2.27、2.03、1.86、ＭＲＳＡ新規院内発生率は、1000 入院患者延べ日数あたり 0.89、0.78、0.88、0.79、0.62 と共に低下傾向であった。

【結　　論】

日常的な感染対策活動を継続することにより、手指衛生、防護具の適切な使用など標準予防策の遵守率は向上し、抗菌薬は適正に使用された。ＭＲＳＡ新規院内発生率が低下したのは、抗菌薬の適正使用によりＭＲＳＡの検出が減少し、標準予防策と必要時接触予防策の徹底により検出後の拡大を防止できた結果であると考えられた。

〔平成 22 年 2 月 5・6 日　第 25 回日本環境感染学会（東京）にて口演発表〕